

○実顕地一つからの出発

実顕地の経営はいわゆる総合経営でなく、分業での一環経営であるという点ですが、養鶏に限らず一つの事業体を構成する部門は多種多様に分かれ、それを総合して経営しないと一つの経営体として成り立たないわけです。

ところが、各部門毎の充実もさることながら、部門間の調整が一般的には大変難しく、いろいろの管理方法で何とか統制しているようです。そして、各部門の独立採算と責任制を強調しなければ成立しない反面、それを強調するが故に先ずその部門が成り立つことを優先して考えねばならず、会社全体の立場から、又他部門の関連の立場から、ものを見る考え方が通用し難くなる仕組みです。この仕組みは一面そこで働く人たちの心、考え方にも大きく影響し、何よりも先ず自分を守り優先する考え方の人を養成する寢床ともなっているのです。

自然界の動植物の循環原理の適応よろしきを得た、一体の一環経営体として組織した実顕地養鶏法から出発した各単位実顕地・各供給所も、別のもの分けたものを総合して繋ぐというやり方ではなくて、もともと一つのもを便宜上分けただけですから、職場と職場の間は環状に繋がれた環の組織です。そこで働く人たちも和の精神がなければ、仕事も運営もできない仕組みです。（『適正規模実顕地構想』より）

○具現方式の実践を

○全実顕地一つからの実動（経営企画）を如何に為していくのか。

○根本的な見直しを。損得、黒字赤字、高い安い等々、
商売的発想からの決別を。

◎例えば供給部門だったら、事務の簡略化から始められないものだろうか。モノに伝票は付きものなのか？ 棚卸しは？
経営資料は作成しないとか……。

◎ここでの研鑽のねらいは、重箱の隅をつつくところになく、
一つからの出発にあたって 自ら自身が具体的な行為を通して
全実顕地一つの出発点に立つテーマである。